

おいしい

米づくり情報




No.2

令和8年4月15日発行
JAてんどう
天童市農業技術指導会議

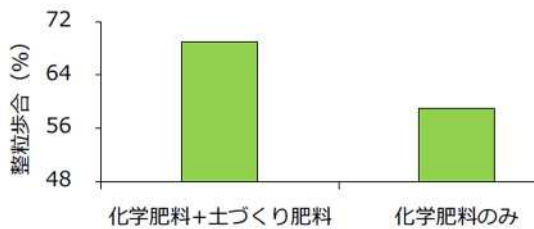
STOP 農作業事故!! 春の農作業安全運動展開中(4/10~6/10)

▶土づくり資材の施用 土づくり ~気候変動に強い米づくりは土づくりから~

・近年、土壌やかんがい水から供給されるケイ酸量が減少しています。土壌改良資材（ようりん、ケイカル等）を投入し、**初期茎数の確保、品質・食味・収量の安定化**を図りましょう。

【主な土づくり肥料】	とれ太郎 20kg	ケイカル 20kg	農力アップ 20kg
品名・荷姿			
施肥量目安	3袋 / 10a	6袋 / 10a	3袋 / 10a

※「農力アップ」は、全国的な需要増加に伴い、本年の在庫は限られております。何卒ご了承ください。



土づくり肥料を毎年施用している圃場では、令和5年の猛暑でも玄米の品質低下が軽減された。

土づくり肥料施用による整粒歩合の向上（「はえめき」、農業総合研究センター、令和5年）

注）土づくり肥料は、ようりん 30kg/10a、ケイカル 150kg/10a を毎年施用

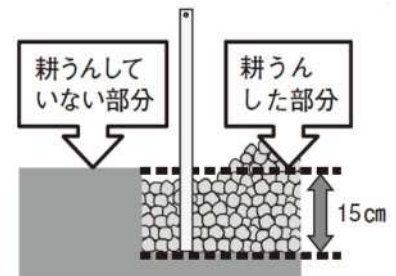
▶乾土効果

・**乾土効果**の発現を狙って耕起は早めに行い、作土全体を十分に乾燥させましょう。

耕起後5日以上降雨がないと、土壌中の窒素が有効化して初期生育の確保が容易になります。

▶作土深の確保

・近年の圃場は作土深が浅くなりがちです。**作土深 15cm**を目標に耕起を行い、①**根域の拡大と根の活力維持**、②**地力窒素の発現と養分保持・供給力の増強**を狙いましょう。



▶代かき……作業後の高低差を±3~4cm以内に

・田面が平らでないと活着の遅延や欠株の発生、除草剤の効果低下と薬害の発生等が起こる可能性が高まります。代かきの時期は、移植の2~3日前が適期です。

・代かきから移植までの間が長すぎると、雑草の発生が多くなります。また、代かき直後に移植すると苗の埋没や浮き苗による欠株を生じます。

・本代の前に粗かくことで、代かきの効果（田面を平らにする・水漏れを防ぐ等）を高めます。

・本代をゆっくり丁寧に行うことで、ワラが浮くのを防ぎます。

▶育苗管理……播種後1週間の管理が決め手です！

～ハウス内の温度を温度計で確認していますか？～

出芽を安定させ、苗を焼かずに健苗を作るには、ハウス内を適温に保つことが重要です。
特にビニールを張り替えたハウスは、温度が急激に上がりやすいので十分に注意しましょう！！
 また、無加温出芽の場合は、ハウス内の気温だけでなく、粉のある育苗培土の温度が、出芽の適温
 (25℃～32℃) になっているかこまめに確認しましょう。

※ 温度計は2つ準備！①ハウス内に吊り下げ、②育苗箱の土中に差し込み

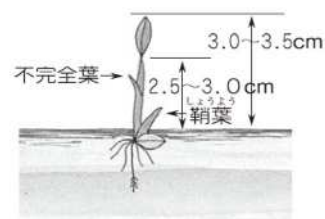
▶出芽期

- ・かん水は播種時にたっぷり行いましょう。
- ・幼芽が覆土を持ち上げ、もみが露出している場合には隠れる程度に覆土をしましょう。
- ☆無加温出芽の場合は、高温障害に注意して出芽後（播種後4～5日又は覆土から5～10mm出芽）は速やかに資材を取り除いて下さい。

時期	昼間	夜間
出芽期	30～32℃	
緑化期	25℃	15℃
硬化期	20～25℃	8℃以上

▶緑化期～硬化期

- ・かん水は十分な水量を早朝に1回が基本です。夕方のかん水は、床土温度を下げるので厳禁です。
- ・被覆資材は、**第1葉の完全展開（草丈3.5cm程度）を目安に除覆**しましょう。
- ・稚苗は冷たい風や直射日光にあてないで、できるだけ早く緑化に移すようにして下さい。
- ☆ハウス内での育苗は、トンネル育苗に比べ生育が旺盛になるので伸び過ぎに注意しましょう。



緑化期終了時の理想図
(除覆のタイミング)

▶病害虫防除（苗立枯病）

時期	対象病原菌	使用薬剤	使用方法
育苗期 (は種7～10日後)	苗立枯病 (ピシウム菌)	タチガレン液剤 (は種時又は発芽後 2回以内)	500倍で500ml/箱灌注する

※ 特別栽培米では使用しない

▶追肥（育苗）

	1回目	2回目	施用方法（1箱当り）
稚苗	1.5葉期	田植5日前	★液肥使用の場合 100倍 （トミー液肥 または 液肥2号） 液肥現物8ml（水800ml）を溶かして散布 ★硫安使用の場合硫安現物5g（水300ml）を溶かして散布
中苗	2.0葉期	田植5日前	

※硫安使用の場合は、散布直後必ず水洗いをして下さい。（葉やけ防止のため）